

を や ろ う

四季が美しい山あいの里・京都大原。そこに移住して農薬や化学肥料を使わない有機農業を始めた人たちがいる。グループの名は「オーハラボ」。宮沢賢治がふるさと岩手を「イーハトーブ」と呼んだことになっている。大原は自然に恵まれているのに市街地には近く、野菜を販売するうえで都合がいいのだという。彼らの就農で耕作放棄地もかなり減った。遊び心を大事にする人たちで、その自由な感性が新しい風を農業に吹き込んでくれそうだ。



太田 順一(おおた・じゅんいち)

1950年奈良県生まれ。早稲田大学政治経済学部中退。大阪写真専門学校(現・ビジュアルアーツ専門学校 大阪)卒業。第12回写真の会賞、日本写真協会賞第1回作家賞、第34回伊奈信男賞受賞。主な写真集は、『大阪ウチナンチュ』(ブレーンセンター)、『ハンセン病療養所 百年の居場所』(解放出版社)、『群集のまち』(ブレーンセンター)、『父の日記』(ブレーンセンター)など。著書に『ほくは写真家になる!』(岩波書店)。

フォト・エッセイ

耕す人々 ④

写真・文 太田順一 Junichi Ota

楽しく農業





同志社大学の院生だった6年前、渡辺雄人^{ゆうと}さん(30)は大原暮らしを始めた。農村におけるソーシャルイノベーション研究の実験施設である農家と農地の管理を担当教授から任されたのだ。三千院の近くにあるその農家に住み込み、見よう見まねで耕作を始めてみると、自分でも驚いたことに朝市に出して売れるくらいの野菜ができた。ひょっとして農業で食っていけるかも……。

「遊び半分というか、研究の一環で始まったことなのです」

きっかけは「遊び半分」でも、あとは一途だった。有機農業の大家に弟子入りして本格的に農業を学び、大学院の後輩である民^{たみ}さん(29)と結婚すると、ふたりで田んぼ4反、畑5反の農園を営む。農水省制定の有機JAS認証も取得した。

同じころ、大阪などから大原に入植してきた同年代の有機農業者たちと知り合い、自然とグループができた。オーハラーボと名をつけたのは民さんだ。

「自然も文化も含めて、この大原という地域を丸ごと愛していきたいのですね」

代表者がいて会則があってというのではなく、あくまでもゆるやかなつながりだ。それでも地縁者でないのに大原に新規参入してきた者同士、お互い心強い仲間である。農機具を貸し合うのはもちろんのこと、最近では子育てで助け合うことが多い。

「農業は高リスクの仕事だと思われませんが、ナスがだめならキュウリがあるという具合に、少量多品種栽培で何とか乗り越えられます。家が農家だったからとかでなく、自分で選んでやりたくてやってるわけですから、楽しく農業をやらないと。オーハラーボの仲間も皆、遊ぶことが好きな人ばかりです」



野菜の藤さん 電気はあるがガス水道なしという大原の山奥に住む。廃村復興につながればと(藤井康裕さん)

京都大原サトリキ農園

サトリキは「里の力」。野菜づくりを通じて大原の里の力に、との思いから(山本さん一家)



オーガニックファーム こうや
NPO京都子どもセンターと提携し、子どもたちの農園体験も実施(神谷さん一家)



ヴィレッジ・トラスト つくだ農園 「つくだ」は渡辺夫妻の棚田がある場所の地名。
雄人さんは昨年、同志社大学大学院の博士号を取得した



音吹畑 WWOOFのホストをしているので来客が絶えない。お金のやり取りなしで、宿と食事を提供し、かわりに畑仕事を手伝ってもらうシステムだ
(高田さん一家)
※WWOOF [ウーフ] は、World Wide Opportunities on Organic Farmsの頭文字

わっぱ堂 野菜づくりをしながら、古民家で大原の食材をつかった料理店を営む。完全予約制(TEL.075-744-3212)。草木染めのギャラリーを併設(細江さん一家)